

## 水田・里山放牧推進協議会第4回情報交換会開かれる

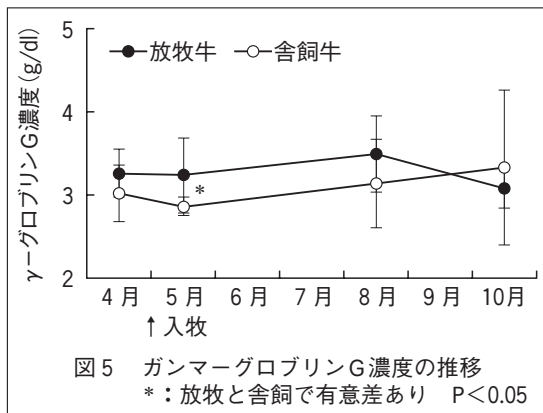
平成16年3月5日(金)午後、畜産草地研究所(那須)GGホールで第4回水田・里山放牧推進協議会第4回情報交換会が開かれました。栃木県内の農家、普及センター、試験研究機関、長野県、茨城県、群馬県、福島県、千葉県、埼玉県から行政機関や試験研究機関の担当者など約50名が参加しました。今回は「放牧と牛の健康」というテーマで北海道大学獣医学部の小沼先生、畜産草地研究所衛生管理研究室の假屋室長から話題提供を頂きました。

小沼教授は「放牧で気をつけなければならない病気とその対策」という題で、ピロプラズマ病と牛白血病の予防あるいは清浄化対策について講演しました。

小型ピロプラズマ病は現在殺ダニ剤のプアオン法などにより減少しているが、ダニが薬剤への耐性を獲得するのは時間の問題と考えられるので、マダニが牛にとりついて吸血することを阻害する機能を阻害するワクチンの開発に取り組んでおり、近い将来ワクチンが開発できる可能性があるとのこと。



会議風景



会議で使用された資料(抜粋)

牛白血病は死亡率は2~3%と低いが、一旦感染すると終生ウイルスを保持して他の牛に感染させる可能性がある病気で、年々増えている状況にあります。清浄化するには、年々2~3回BLV(牛白血病ウイルス)検査の実施、陽性牛の分離飼育、生まれた仔牛への加熱または凍結処理初乳の投与と人工哺育、陽性牛の早期に淘汰等の対応を行うこと。また、直検手袋の1頭毎の使用、除角・去勢・イヤータグ装着器具の消毒(70℃以上のお湯に浸ける)、陽性牛は処置を最後にすることを確実に守ればあまり経済的損失を受けないで数年で清浄化できるとのこと。

假屋喜弘室長からは、「放牧による牛の健康増進効果」という題で講演がありました。放牧は気象環境などからの適度な刺激、運動量増加による健康増進、束縛が少なくストレス回避が可能、生草摂取などが作用しあって、肺・循環器機能の亢進、栄養・内分泌機能の改善、体格・筋肉・内臓の発達、体脂肪・筋肉・乳質の改善などの放牧効果が期待されること、また、放牧による乳量や繁殖性への効果も報告されていること、さらに、放牧経験牛では概してγグロブリン濃度は高く、放牧経験牛ではすでに免疫力が増強していることなどが紹介されました。

(飼料資源研究官 落合一彦)



水田・里山放牧推進協議会ホームページ